



平成22年度 池田家文庫絵図展

絵図にみる 中国四国地方の 城下町

平成22年度 池田家文庫絵図展

絵図にみる 中国四国地方の 城下町

会
会
主
後

期
場
催
援

2010年11月16日(火)～11月28日(日)
岡山市デジタルミュージアム 4階企画展示室
岡山大学附属図書館 岡山市デジタルミュージアム
岡山県教育委員会 岡山市教育委員会 山陽新聞社 岡山日日新聞新社
中国新聞備後本社 朝日新聞岡山総局 読売新聞大阪本社 毎日新聞岡山支局
産経新聞岡山支局 日本経済新聞社岡山支局 NHK岡山放送局 RSK山陽放送
OHK岡山放送 TSCテレビせとうち KSB瀬戸内海放送 RNC西日本放送

ごあいさつ

今年度も岡山市デジタルミュージアムと岡山大学附属図書館は共同で企画展「池田家文庫絵図展「絵図にみる中国四国地方の城下町」」を開催することができました。本展覧会は岡山大学と岡山市の文化事業協力協定に基づいた事業であり、本年度で6回目の開催となります。

この展覧会は、岡山大学附属図書館の所蔵する、江戸時代の備前岡山藩池田家の藩政資料である池田家文庫を、広く地域社会の皆様にご公開し、親しんでもらおうという趣旨で企画するものです。中でも池田家文庫の特徴のひとつである地図資料、「絵図」を中心に展示をしています。

今回のテーマである城下町は、大名が領地を支配するために居城を中心に拠点都市として整備したものです。江戸時代以降の城下町は、政治的な役割と、地域流通の中心としての役割をあわせもっていました。また、地域の自然景観、社会状況に応じて各地に個性的な城下町が出来上がりました。岡山をはじめ、現在の県庁所在地や地域の拠点的な都市には城下町をルーツとする都市が多く見られ、近世の城下町の風情をただよわせている都市も少なくありません。中国四国地方の城下町を描いた絵図をご紹介します本展で、現在の都市の成り立ちに思いをはせていただければと存じます。

この池田家文庫絵図展で、皆様が岡山、ひいては日本の歴史に興味や関心を抱いていただき、池田家文庫を地域の共有の財産だと感じていただければ、大変嬉しく存じます。

2010年11月16日

岡山大学附属図書館
館長 倉地 克直

岡山市デジタルミュージアム
館長 森 隆 恭

凡例

- 1 本図録は、岡山大学附属図書館と岡山市デジタルミュージアムが2010年11月16日(火)から11月28日(日)まで開催する『企画展「池田家文庫絵図展「絵図にみる中国四国地方の城下町」」』の図録である。
- 2 展示番号と本書の図版番号、出展資料目録に付した番号は一致する。また表記は図版番号、資料名、池田家文庫整理番号、頁数、年代、法量(cm)の順に記した。
- 3 本書に掲載した展示資料の写真は、岡山大学附属図書館が所蔵する絵図デジタル画像及び岡山市デジタルミュージアムが撮影した画像である。
- 4 本書の総説・展示資料解説は、岡山大学附属図書館館長 倉地克直が執筆した。編集は岡山大学附属図書館と岡山市デジタルミュージアムで行った。

関連行事

オープニングトーク

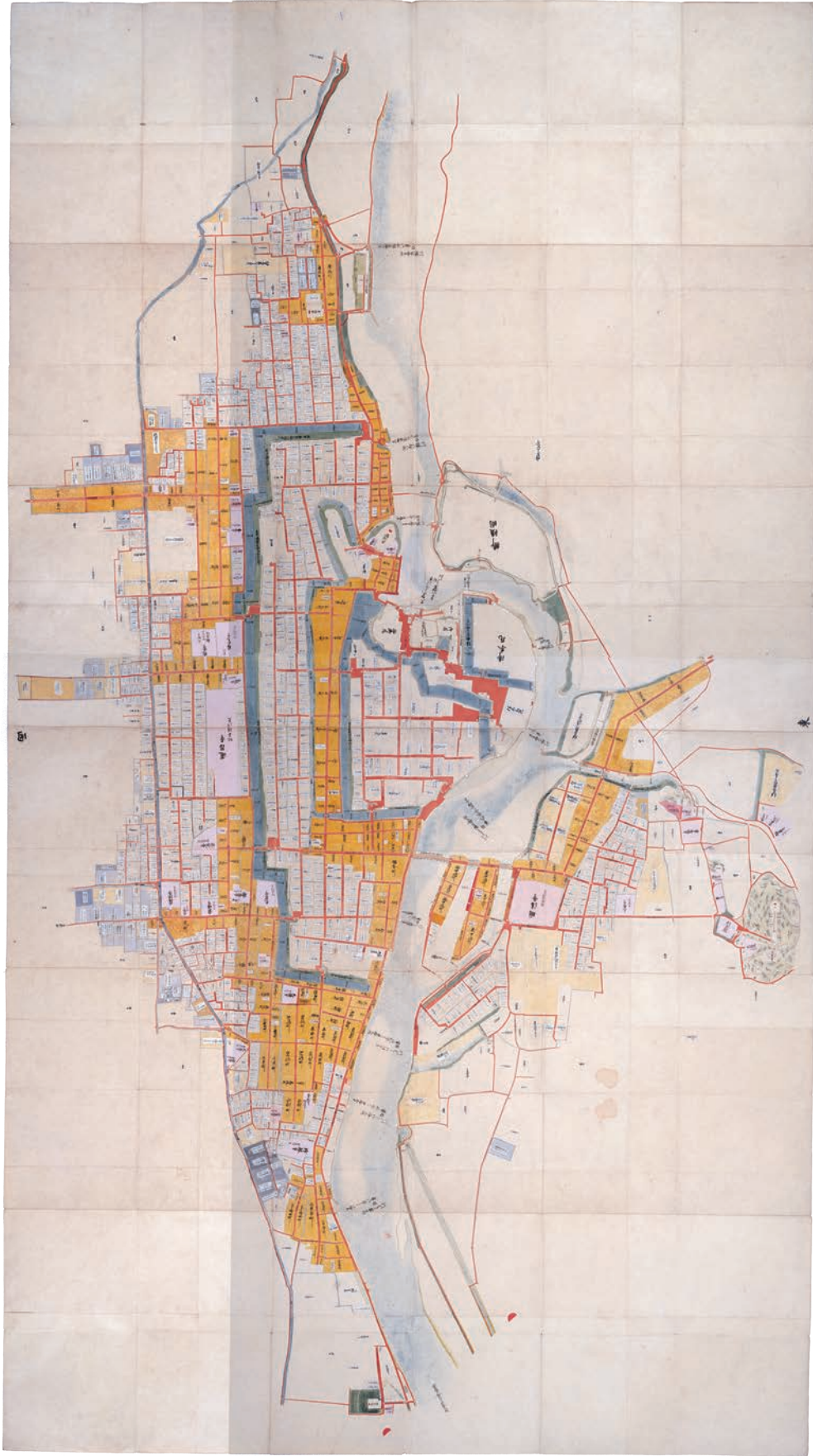
日時 2010年11月16日(火)
午前10時～午前10時30分
場所 岡山市デジタルミュージアム 4階企画展示室
講師 岡山大学附属図書館 館長
教授 倉地 克直

記念講演会

「デジタルマップで甦る城下町」
日時 2010年11月20日(土)
午後1時30分～午後3時30分
場所 岡山市デジタルミュージアム 4階講義室
講師 徳島大学大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部 地域地理学研究室
教授 平井 松午

同時開催

中国四国地区国立大学図書館貴重資料等共同展示
(参加大学：香川大学・島根大学)



参考資料 びぜんおかやまちりかたくいちまいず 備前岡山地理家宅一枚図(複製) T6-32 文久元年(1861) 302.4×168.3cm
幕末期の岡山城下町じきわりずの屋敷割図。表紙付き。川下図2枚・畝帳1冊とともに桐箱に収められている。
川下図(T6-33・T6-34)には旭川の河口部までが描かれ、城下町図じちやうに接合するように作られている。

目次

総説	1
中国四国地方の城下町	2
出展資料解説	4
出展資料目録	31
池田家文庫絵図展・記念講演会開催記録	32

城下町のなりたち

江戸時代の大名が領地を支配する拠点として設けた都市が、いわゆる城下町である。現在、県庁所在地や地域の中心となっている都市には、江戸時代の城下町を基礎にして発展したものが少なくない。

城下町は、地域の武士が集住する行政的な役割と地域の流通拠点であるという経済的役割とを持っていた。戦国時代の城下町は、この二つの役割が空間的にも分離していたが、安土桃山時代になると、堀や土塁などの「惣構え」によって二つの空間が一つのまとまりとして構成されるようになる。さらに江戸時代になると城下町内部の整備がすすみ、武家地・町屋地・寺地という身分別の空間が整然と区画されるようになった。

江戸時代の城下町は、このような共通した特徴を持っているが、他方では地域の自然景観や社会状況に対応して、それぞれに個性的なかたちを持っている。江戸時代には260をこえる大名家があつて、それぞれに領地を支配する拠点を置いていた。ただし徳川幕府は、「一国一城令」を出して不要な城郭の破却を命じたから、城郭を持つ城下町は80あまりにとどまった。その他の都市は、陣屋町とされた。

城はだれのものか？

江戸時代の大名は、徳川幕府の命令によって各地に転封されたり、跡継ぎがなくて断絶したり不行跡を咎められて改易となることも少なくなかった。領主の交替にあたっては、幕府から上使(幕府の担当者)が派遣され、近隣の大名が次の藩主が入城するまでのあいだ城の管理を命じられた。城の請取にあたっては、城付きの武器や国絵図・郷帳などの行政資料も引き継がれた。直接の請取を命じられなくて

も、近隣の大名は混乱や騒動が起こらないように、藩境などの警備にあたった。

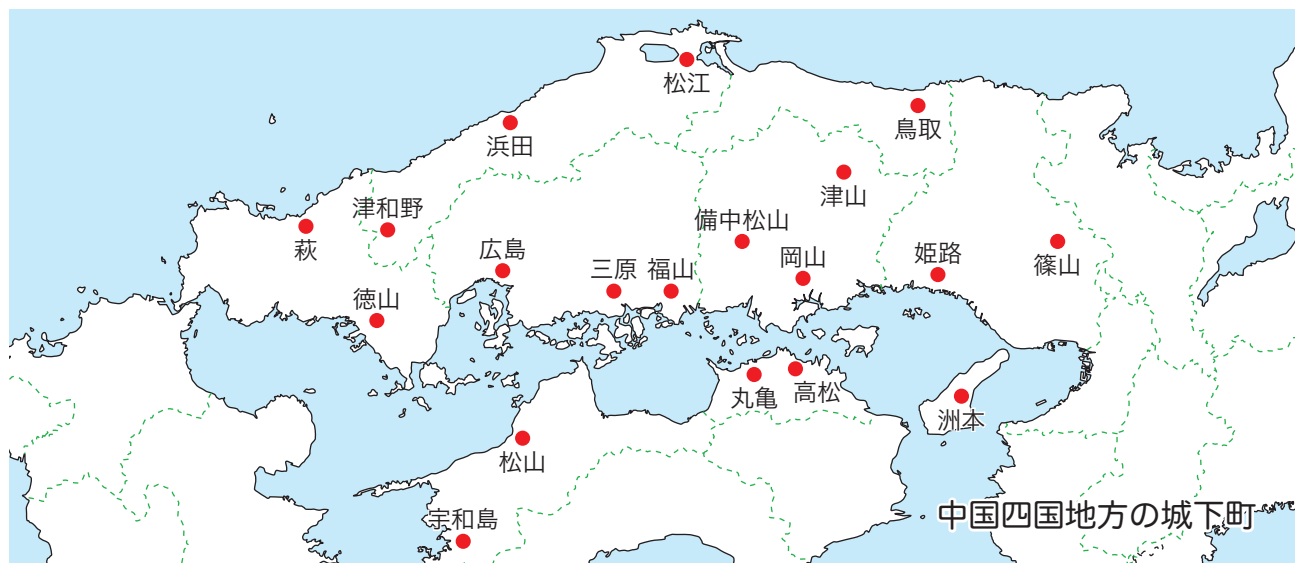
幕府は正保年間(1644～48)の国絵図作成にあわせて、全国の「城絵図」を徴収した。この絵図には堀・石垣や城門・櫓などの防御施設を細かく描かせるとともに、城下町の様子についても描き上げさせている。また、「武家諸法度」によって城郭の修理については幕府の許可を得るように定めていた。

このようにみえてみると、城郭は藩主の全くの私有物ではなく、「公儀」である幕府の管理するものであったことがよく分かる。

軍学としての城絵図

平時においても武備を怠らないことは、武士の嗜みであった。長い平和が続くとそのことは忘れられがちであったが、武芸や軍学を身に付けることに努める武士も少なくなかった。城の防備を固めるために、堀や城門の配置、曲輪の構造をどうするか。そのための築城術も、軍学知識の一つであった。

軍学では、現実にある城郭の善し悪しを分析したり、理想的な城郭の設計図を作ったりした。それは文字通り机上の空論に終わりがねないものであったが、そのために多数の城郭図や城下図が残されることになった。藩政文書には、そうした軍学としての絵図も少なくない。池田家文庫では、特に「齊輝君御分」と記されて袋に入れられたものがまとまっている。齊輝は8代藩主池田齊政の長男。寛政9年(1797)11月5日生まれ、幼名は新之丞。文化12年(1815)2月19日、内蔵頭に任じられ、齊輝と改名。文政2年(1819)3月18日に亡くなった。これらは、齊輝の軍学学習用に、家臣たちが描いた図を集めて袋入りにまとめたものと思われる。



絵

説

中国四国地方の城下町

展示では、池田家文庫にある中国四国地方(山陰道・山陽道・南海道)の城下町を描いた絵図のなかから、主なものを紹介する。それぞれの城下町について簡単に説明する。

姫路

関ヶ原の戦いののち、その戦功によって池田輝政が播磨一国52万石を与えられ、築城した。慶長18年(1613)輝政が病死すると嫡子の利隆が相続したが、元和2年(1616)に急死した。しかし子の光政は幼少であったために鳥取に転封となり、元和3年(1617)本多忠政が15万石で入封した。その後は親藩・譜代の松平氏・榊原氏・酒井氏が受け継いだ。なお、本多忠政の子の忠刻と天樹院(徳川秀忠の娘・千姫)との間の子である勝子が光政の妻として嫁している(円盛院)。

鳥取

戦国時代に山名氏によって久松山に築城された。羽柴秀吉の攻撃によって落城したのちに宮部継潤が入城して、因幡国の経営にあたった。関ヶ原戦後には、池田輝政の弟の池田長吉が6万石で入封し、城下町の整備を行った。元和3年(1617)池田光政が因幡・伯耆32万石を与えられて入城し、城下町の拡張を行った。寛永9年(1632)岡山藩主の池田忠雄が亡くなったが、その子の光仲が幼少であったために、光政との間で一族同士の国替えが行われ、光仲が鳥取に入った。以後その子孫が幕末まで鳥取藩主を勤めた。

岡山

戦国時代末期に宇喜多直家・秀家によって築城され、慶長3年(1598)に天守閣が完成した。その後小早川秀秋・池田忠継・池田忠雄によって、整備された。池田忠継・忠雄の兄弟は、池田輝政の子で、母は徳川家康の娘の富子(督姫・良正院)であった。寛永9年(1632)忠雄の子の光仲との国替えによって池田光政が入封したのちは、その子孫が幕末まで藩主を勤めた。領地は備前一国28万200石と備中5郡のうち3万5000石、あわせて31万5200石であった。

赤穂

古名を加里屋という。関ヶ原の戦いののちは池田輝政の領地の内。輝政が亡くなると子の忠継の領分とされたが、元和元年(1615)に忠継が亡くなると弟の政綱に与えられ、さらにその弟の輝興が継いだ。政綱・輝興ともに母は富子(督姫・良正院)である。正保2年(1645)輝興が亡くなると浅野長直が5万3500石余で入封した。赤穂城および城下町はこの浅野氏によって整備されたが、元禄14年(1701)の

いわゆる赤穂事件によって断絶となった。その後宝永3年(1706)に、旧津山藩主森家の分家である森長直が2万石で移され、幕末まで存続した。

津山

慶長8年(1603)森忠政が美作一国18万6500石を与えられて入封、鶴山に城郭を築き城下町を建設した。森家は元禄10年(1697)に断絶となり、翌年松平長矩(宣富)が美作国のうちに10万石を与えられて入部した。このとき城請取を命じられたのは広島藩浅野氏で、家老の浅野伊織は約7か月津山に在城した。また、幕臣の赤木平左衛門と仁賀保孫九郎が目付として派遣された。松平家は途中5万石に減封されたが、のちに10万石に復帰、幕末まで存続した。

備中松山(高梁市)

臥牛山の城郭は戦国時代に三村氏によって整備された。関ヶ原戦後は国奉行として小堀政次・政一が山下の城下町を整備した。元和3年(1617)鳥取から池田長幸が移封され、寛永19年(1642)には水谷勝隆が成羽から移された。水谷氏時代に根小屋が大改築され、山上と山下が一体として活用された。

水谷氏が断絶となった元禄7年(1694)には赤穂藩浅野長矩が城請取を命じられている。その後は、安藤氏・石川氏・板倉氏と譜代大名に受け継がれた。

備後福山

元和5年(1619)に水野勝成が10万石を与えられて入部、城郭と城下町の建設を行った。元禄11年(1698)水野氏は継嗣がなかったために断絶、領地は幕府領とされた。このとき岡山藩は命じられて検地を実施、5万石増加の15万石となった。その後松平忠雅が出羽山形から10万石で入封、幕末まで存続した。

丹波篠山

慶長14年(1609)松平康重が5万石を与えられて入部、城郭は池田輝政を惣奉行とする天下普請(幕府が企画・監督し、諸大名に実際の工事を分担させる城普請)として建設された。その後、譜代の松平各家に受け継がれた後、寛延元年(1748)に青山忠朝が移封され、幕末まで同家が居城した。

広島

天正17年(1589)から10年間をかけて毛利輝元が築いた。方形の本丸を中心に、太田川の流路を堀として利用しながら町を築いている。関ヶ原戦後、福島正則が入城するが、幕府に無断で修復を行ったことなどを理由に改易され、元和5年(1619)浅野長晟が安芸1国42万6500石を与えられて入封した。その後は浅野氏が代々藩主を務め、幕末の長州戦争では幕府軍の本営が置かれた。

三原

永禄10年(1567)小早川隆景が築城した。関ヶ原戦後は広島藩の支城とされ、元和5年(1619)広島藩家老の浅野忠吉が城主となったのちは、幕末まで代々同家が城主を務めた。

徳山

徳山藩は、元和3年(1617)に毛利輝元の次男^{なりたか}就隆が周防国都濃郡に3万石を与えられて分家したことに始まる。のちに4万5000石に加増され、幕府から諸侯として遇せられた。就隆は初め居所を下松に置いたが、慶安3年(1650)徳山に居館を移し、以後幕末まで続いた。

萩

関ヶ原戦後、長門・周防2か国に減封された毛利輝元は、日本海に面した萩に築城した。以後毛利家の城下町として栄えたが、幕末の文久3年(1863)藩の政庁は山口に移された。

松江

関ヶ原戦後、出雲・隠岐24万石を与えられた堀尾忠氏は尼子氏の旧城富田城に入った。その後、より発展性のある宍道湖畔への移転を計画、慶長16年(1611)松江城が完成した。しかし寛永10年(1633)堀尾家は継嗣なく断絶、あとに入った京極忠高も4年で病死した。寛永15年(1638)松平直政が18万6000石を与えられて入封、以後その子孫が代々藩主を務めた。

浜田

元和6年(1620)古田重治が5万7000石を与えられて入部、亀山に築城した。その後古田氏は御家騒動のため断絶、慶安2年(1648)松平康映が入封した。松平家は宝暦9年(1759)下総古河に移され本多氏が入ったが、明和6年(1769)松平康福が復歸、以後幕末まで続いた。しかし、長州戦争のとき毛利軍に攻められて落城、松平武聡は美作国鶴田に逃れた。

津和野

戦国時代には毛利氏が支城を築いていたが、関ヶ原戦後に坂崎直盛が入城した。しかし坂崎氏はまもなく断絶、元和3年(1617)亀井政矩が4万3000石を与えられて因幡国鹿野から入部した。以後幕末まで同家が代々藩主を務めた。

高松

天正16年(1588)生駒親正によって築城が開始された海城。生駒氏が改易されたのち、寛永19年(1642)に松平頼重が12万石を与えられて入封、以後松平氏が藩主を務めた。頼重は天守閣を初めとした城郭の増改築や城下町の整備に力を尽くした。

丸亀

丸亀城は、初め高松城の出城として生駒氏によって造られた。「一国一城令」によって一時廃城となったが、寛永19年(1642)山崎家治によって再建された。山崎家断絶後は京極高和が6万石を与えられて入部、天守閣を完成した。以後京極氏が藩主を務め、城下町の整備と発展に尽くした。

宇和島

藤堂高虎が慶長元年(1596)から6年間をかけて築城。のち元和元年(1615)に伊達秀宗が10万石で入城、城郭と城下町の整備に努めた。以後伊達家が藩主を務める。

伊予松山

関ヶ原戦後、加藤嘉明が伊予半国20万石を与えられて入部、松山に城郭と城下町を建設した。加藤氏の後は蒲生忠知が入り、さらに寛永12年(1635)松平定行が15万石を与えられて入部、以後幕末まで松平氏が代々藩主を務めた。

淡路洲本

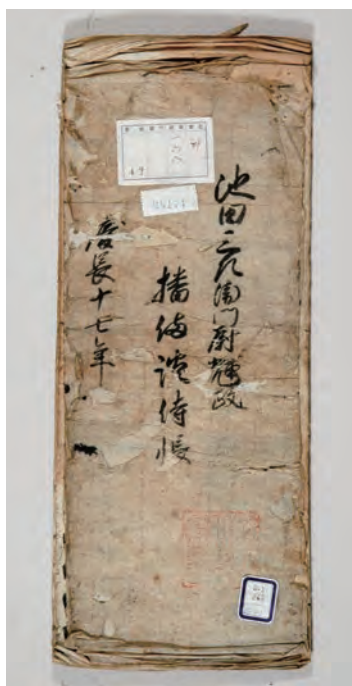
天正13年(1585)脇坂安治が入部してのち、本格的な城下町建設が始まった。しかし慶長15年(1610)淡路国を与えられた池田輝政は岩屋城を築き、その後池田忠雄が由良に築城したために、廃城となった。元和元年(1615)大坂の陣の戦功により淡路国は蜂須賀氏に与えられ、その後居城を洲本に戻して城下町を再構築した。以後は、家老の稲田氏が城代を世襲した。

出展資料解説



1 ばんしゅうひめじじょうかず 播州姫路城下図 T6-31 1枚 90.0×124.6cm

姫路城と城下町を描いた絵図。本丸内は天守閣・御殿・櫓を絵画的に描いている。城下部分については、家中屋敷・組屋敷・町・寺などの区別を文字で示している。同一絵図2枚のうち、新しい写しのほうである。



2 ばんびたんざむらいちょう 播備淡侍帳 D1-262 1冊 慶長17年(1612) 36.6×14.0cm

表紙に「池田三左衛門尉輝政 播備淡侍帳 慶長十七年」とある。「三万三千石 伊木長門」以下池田輝政の家臣が列挙されている。



3 はりまさいしょうさまおんだいざむらいちょう 播磨宰相様御代侍帳 D1-1 1冊 元禄13年(1700) 写 12.6×18.6cm

慶長18年(1613)の池田輝政の家臣団を書き上げたもの。「三万三千石 伊木長門」以下の播磨分と「三万二千石 池田出羽」以下の備前分とが分けられている。末尾に「慶長十八年四月六日」の日付と「日置豊前・土肥周防・荒尾但馬・池田出羽」の署名がある。岡山藩池田家の侍帳と同じ仕様で、表紙に「元禄十三庚辰曆写」と書かれている。

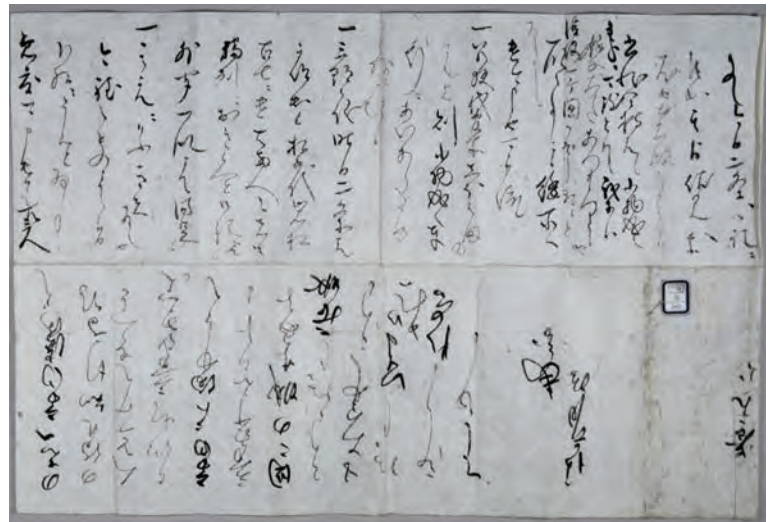


4 いけだしじだいひめじじょうかやしきわりず
池田氏時代姫路城下邸割図 T6-29 1枚 127.0×130.0cm

姫路城の堀の内の屋敷割りを示した絵図。伊木長門・池田出羽など、池田氏の重臣たちの名前が確認できる。1など(T6-30・31)とセットの絵図であるが、いつ、何のために作られたものかはよく分からない。

5 よこいようげんあていけだしたかしじょう
横井養元宛池田利隆書状
C9-31 1通 慶長20年(1615)閏6月9日
36.0×54.2cm

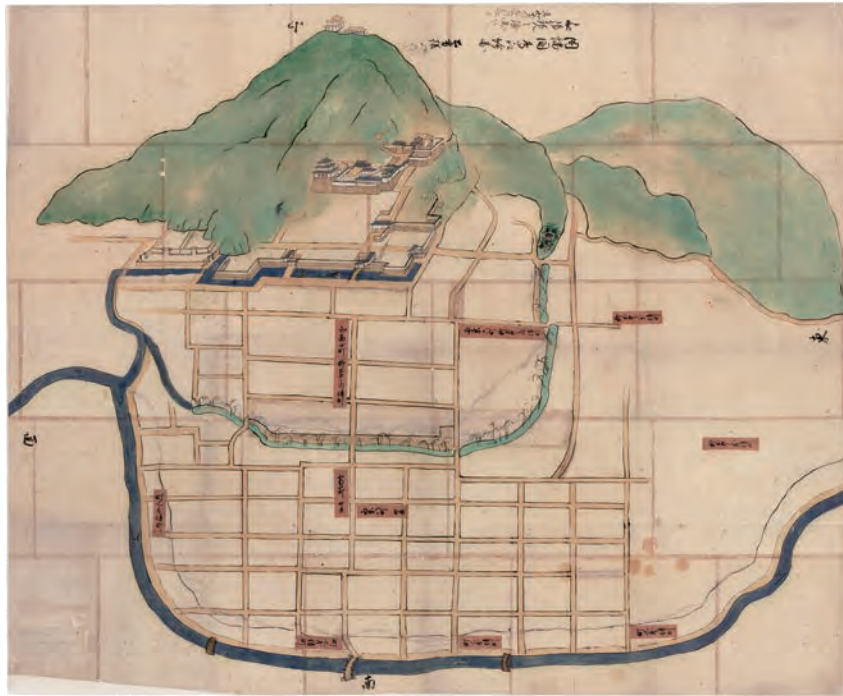
京都にいる池田利隆が姫路にいる家臣の横井養元にあてた書状。播磨での小物成(本年貢以外の諸産物を対象とした雑税)徴収や池田忠継没後の所領の再配分について指示している。利隆は淡路を加増として与えられることを願っていたようだ。「城割」(いわゆる一国一城令)について言及している点でも貴重な資料である。





6 ^{とっとりじょうず} 鳥取城図 T3-268 1枚 文化7年(1810) 82.4×80.2cm

「斉輝君御分山陰道城々図」と表書きした袋入りのうち1枚。筆写者は「松山敬直」。裏面端に「文化七庚午年／因州鳥取之城之図」「治」とあり、池田長吉時代の状況を描いている。柳土手が城下町を画する惣構えになっていて、その南に屋敷地は広がっていない。袋川も真っ直ぐに千代川に注いでいる。方位が東西とあるのは、北南の誤りか。



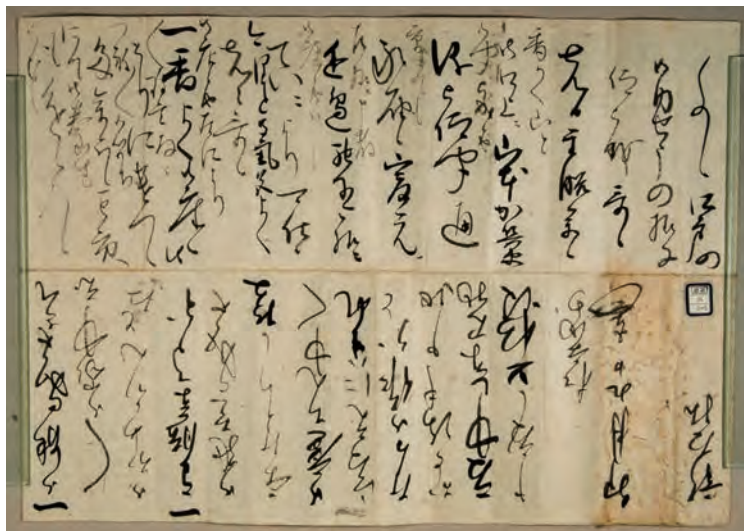
7 ^{いなばのくにとっとりえ ず} 因幡国鳥取絵図 T3-3 1枚 元和5年(1619) 136.0×165.0cm

裏面には表題として「因州鳥取城之図／元和五年九月六日將軍家雷覽之図」とあり、余白には「因幡国鳥取絵図／公方様へ□り被成御覽候絵図也、元和五年九月六日」とある。柳土手の南へ城下町を拡張し、それを囲うように袋川を付け替える計画を示している。付紙で町割も示している。將軍秀忠に直接見せて許可を求めたものか。このとき秀忠は上洛して伏見にあり、光政も伏見に参勤した。



8 ^{いんしゅうおしるず} 因州御城図 T3-59 1枚 84.0×101.6cm

江戸時代後期の鳥取城下を描いた略図。袋川の南に、重臣の^{しもやしき}下屋敷(別邸)や預かり屋敷などが広がっている。大日谷の東照宮が立派に描かれている。



まつだいらしんたろうあてまつだいらくなくいしよじょう
9 松平新太郎宛松平宮内書状

C9-38 1通 年末詳4月9日 37.0×52.7cm

岡山藩主池田忠雄が鳥取藩主であった池田光政にあてた書状。光政が能を演じたことや忠雄の「御庭ちん(亭)」(花島に造られたといわれる得月楼のことか)が話題になっている。



さむらいくみやせちょう
10 侍与寄帳

D1-2 1冊 寛永9年(1632) 14.2×20.2cm

表紙に「寛永九年十月廿三日改」とある。鳥取から岡山へ移った時点での池田家の家臣団を書き上げたもの。家老の知行高は播磨時代と変わっていない。



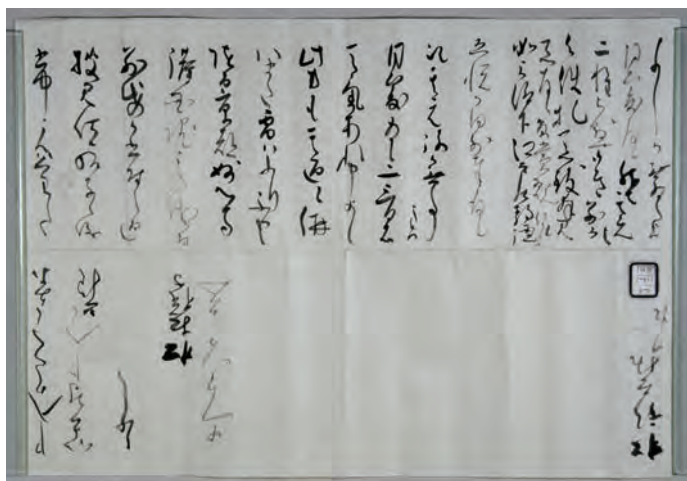
さむらいちょう
11 侍帳(鳥取藩池田家)

D1-3 1冊 寛永11年(1634) 15.0×21.0cm

寛永11年(1634)の鳥取藩池田家の家臣団を書き上げたもの。「壱万三千石 荒尾内匠」以下の知行取りが名を連ねている。当時鳥取藩主の池田光仲は幼少であったため、池田光政が後見を勤めていた。

みょうしんじのこといんしゅうへもうしつかわすかきつけ
妙心寺ノ事因州へ申遣書付 C9-236 寛文6年(1666)カ

12～14の3通は、他の1通とともに「妙心寺ノ事因州へ申遣書付、返事も在之」(光政直筆)と書かれた包紙に包まれている。

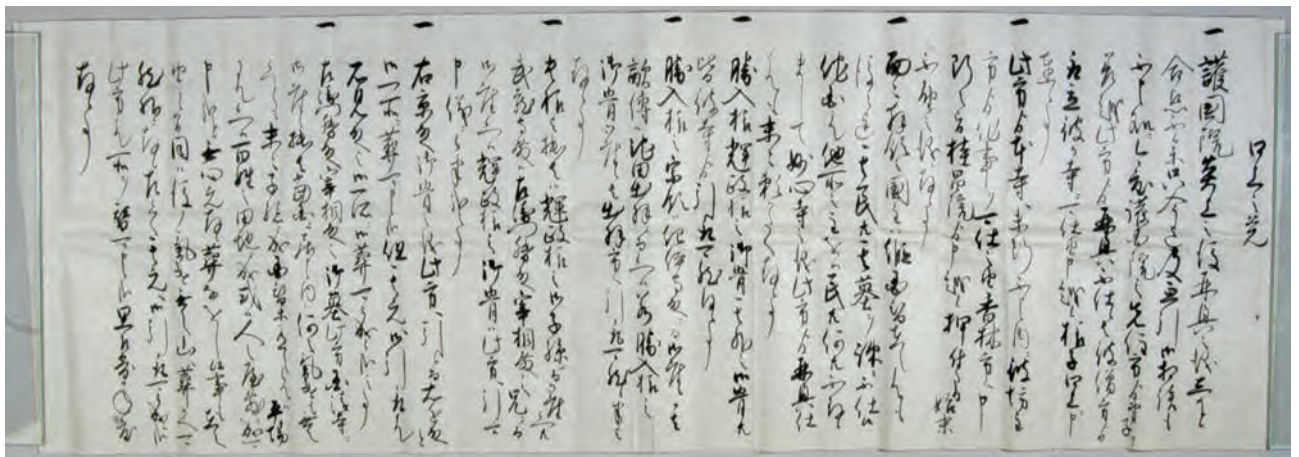


まつだいらしんたろうあてまつだいら
12 松平新太郎宛松平
さがみのかみしよじょう
相模守書状

C8-236-2 1通 寛文6年
(1666)カ11月8日 30.9
×44.8cm

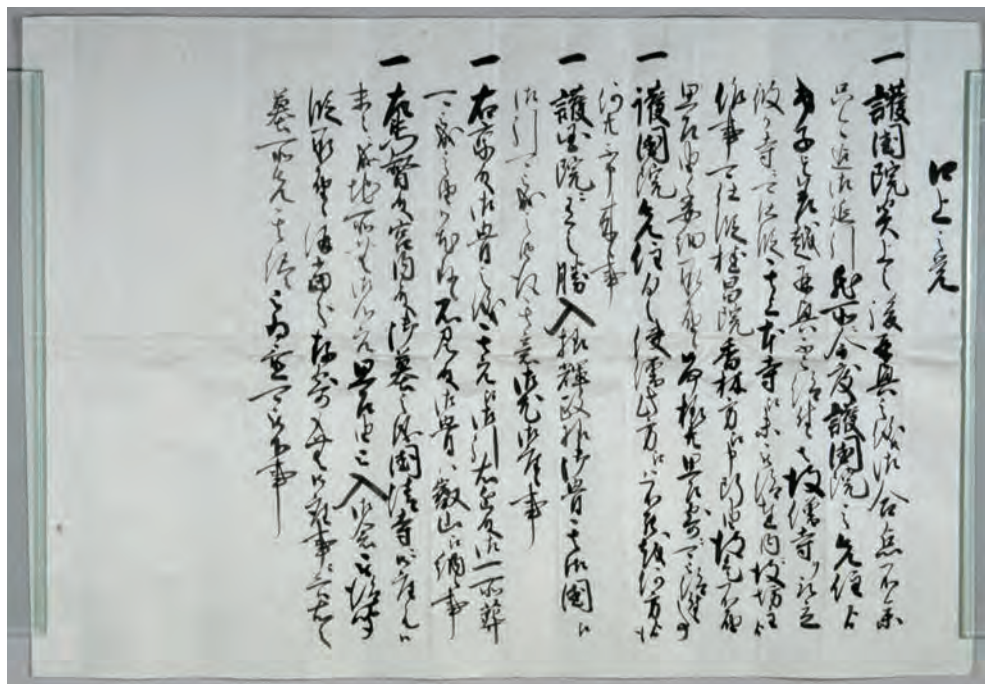
鳥取藩主池田光仲が池田光政にあてた書状。妙心寺護国院の事につき別紙書付(13)をもって光政が伺った件について、書付(14)をもって申し入れたことを伝えている。





13 ^{こうじょうのおぼえ} 口上之覚 C8-236-3 1通 31.4×92.4cm

池田光政から池田光仲へ妙心寺護国院に葬られている一族の遺骨の扱いについて意見を求めた書付。輝政の遺骨は光政が引き取ることなどを告げている。



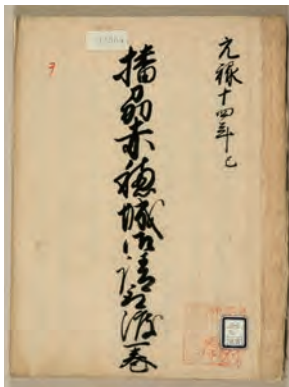
14 ^{こうじょうのおぼえ} 口上之覚 C8-236-4 1通 35.2×50.8cm

先の書状に付けられていた書付。光政からの別紙書付(13)への返事。おむね光政の意見に「御意通り」と答えている。



15 ^{あこうじょうず} 赤穂城図 T3-5 1枚 元禄14年(1701) 211.6×197.2cm

元禄14年(1701)の赤穂城請取の様子を描いた絵図。岡山藩領である八木山や三石からの道筋を含め、岡山藩から派遣された者がもたらした情報が、朱書きで付紙に書かれている。朱筋は城請取役の龍野藩脇坂氏の軍勢の進路を示し、城下での詰番(警備)の箇所は朱の三角印で書かれている。城郭部分の図像が軍学図ふうなものももしろい。



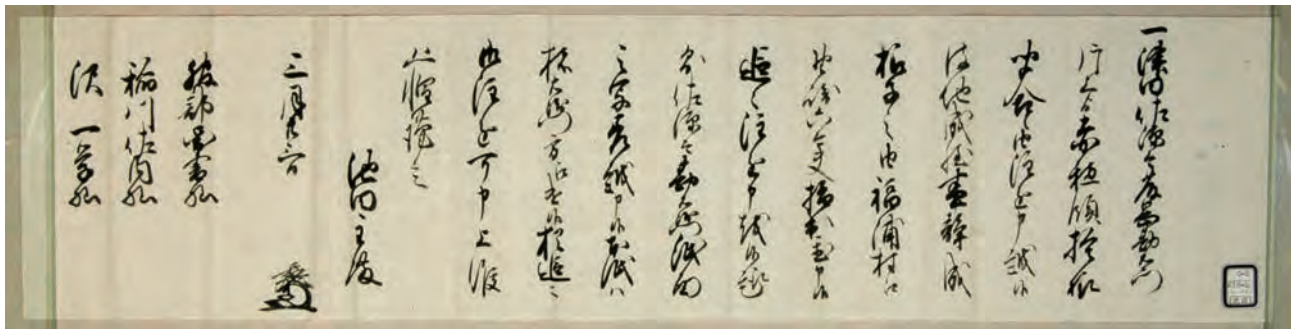
16 ^{ばんしゅうあこうじょうおうけとりわたいしゅうかん} 播州赤穂城御請取渡一巻 C6-34 1冊
元禄14年(1701) 27.4×21.0cm

播州赤穂城請け取りに派遣された龍野藩脇坂淡路守・足守藩木下肥後守および目付・代官衆の通行に岡山藩として対応した記録。警備のため、津田左源太(永忠)組の上下295人・騎馬19騎が片上に詰めた。



17 播州赤穂城図 T3-282 1枚 81.0×82.0cm

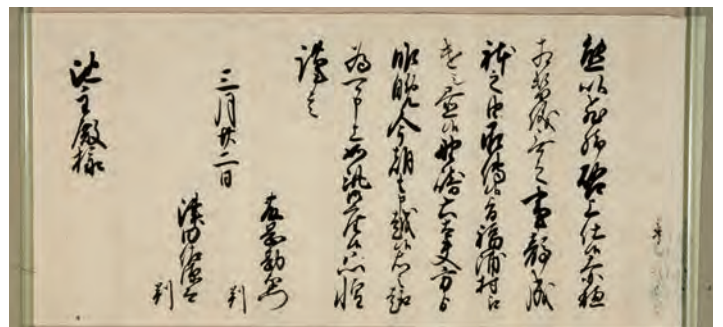
軍学用の城郭図。赤穂城図(15)の城郭部分と基本的に同じだが、西の塩除古堤と北の川除堤の描写、および海側の干潟の情報は、赤穂城図(15)にはない。中央左に領主の変遷を記している。

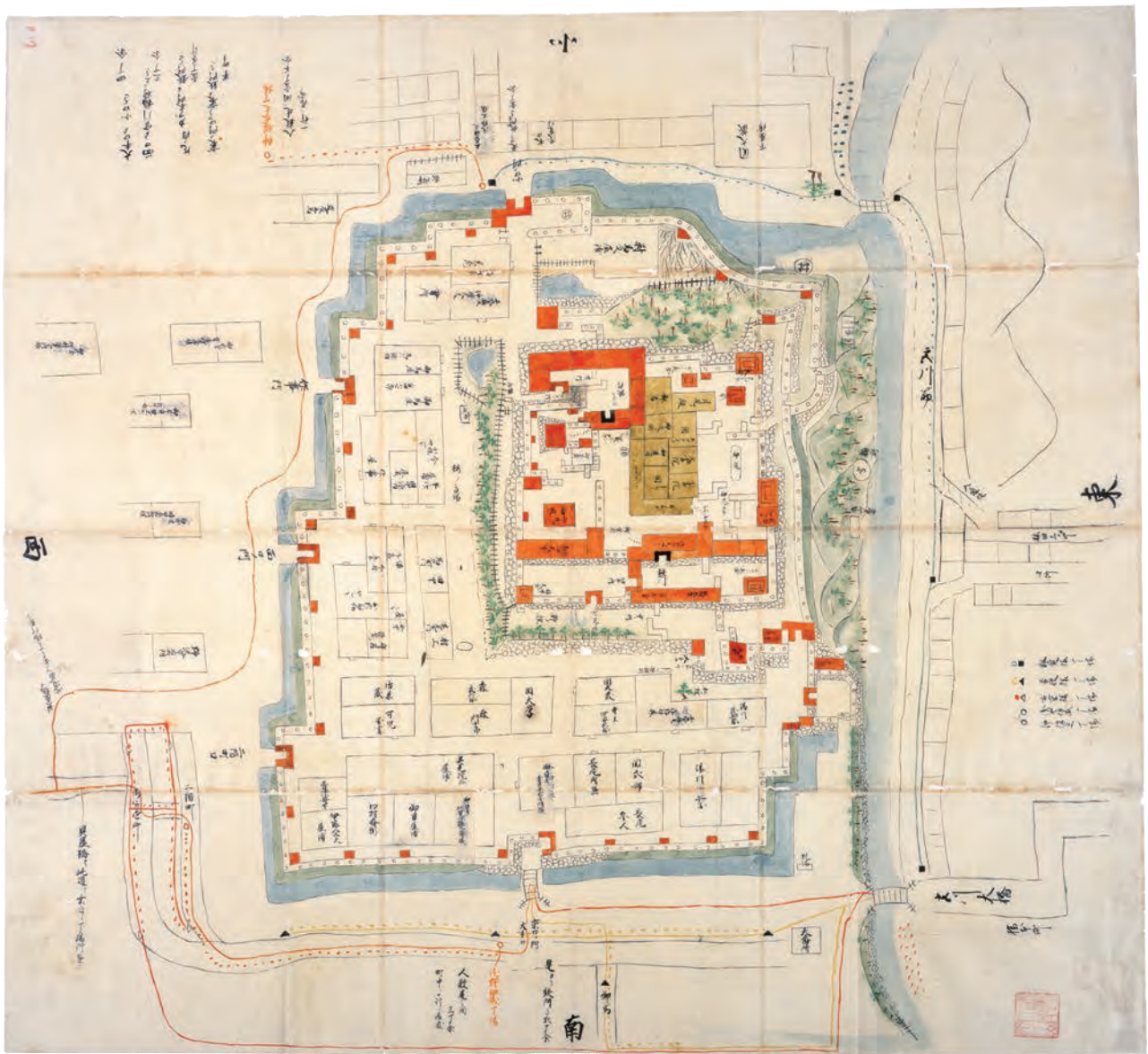


18 服部図書他宛池田主殿書状 C8-218-4-1 1通 元禄14年(1701)3月23日 17.0×71.0cm
岡山にいる家老の池田主殿が赤穂の様子を江戸に居る藩主のもとに知らせた書状。

19 池田主殿宛津田左源太・藤岡勘右衛門書状 C8-218-4-2 1通 17.0×37.1cm

池田主殿が18の書状に添えて、片上で情報収集に当たっている津田左源太・藤岡勘右衛門からの書状を写したもの。「事静かなる様子」とのことである。





20 つやまじょうず
津山城図 T3-1 1枚 元禄11年(1698) 118.5×118.0cm

津山城請取に際して作られた絵図。裏面の端に朱書きで「口三」とある。21の絵図とセット。上使(幕府の担当者)田村右京大夫忠顕、城請取役の明石藩松平若狭守直明・小浜藩酒井靱負忠園、在番役の広島藩松平安芸守綱長の家臣である浅野伊織・沖権大夫の丁場(担当番所)が線や印で示されている。津山藩家臣の屋敷が目付・代官・役人の宿所に当てられ、それぞれに名前を書いた付紙が貼られている。



21 つやまじょうかまちず
津山城下町図 T3-14 1枚 元禄11年(1698) 203.7×136.0cm

津山城請取に際して作られた絵図。裏面の端に朱書きで「ロ三」とある。20の絵図とセット。松平若狭守・酒井鞆負・田村右京・松平安芸守の丁場が記されている。追加の情報が付箋に書いて貼られている。本書では絵図の描き方に合わせて西を上になっている。



22 さくしゅうつやまおしろおうけとりわたしいっかん
作州津山御城御請取渡一卷 C7-275 1冊 元禄11年(1698)
27.9×20.6cm

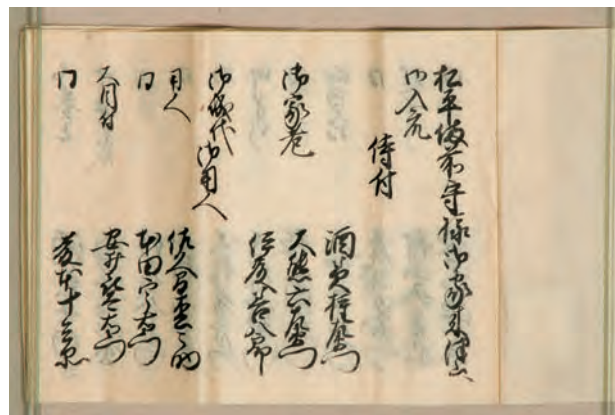
森家断絶により津山城を請け取るために派遣された、上使・請取役・目付・代官などの通行に岡山藩として対応した記録。在番の広島藩士一行は陸路備後東城から津山に入ったが、荷物は海路西大寺へ運び、吉井川を川船で上った。岡山藩がその便宜を図っている。

つやまおしろおひきわたしのせつのおぼえききがき
津山御城御引渡之節之覚聞書 C8-214 元禄11年(1698)

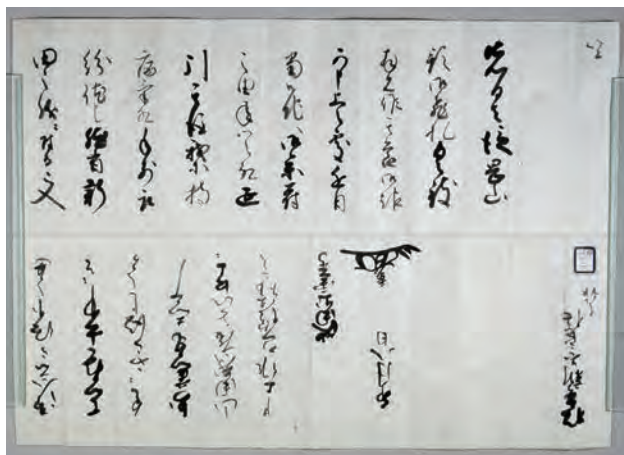
城請取絵図1枚・小帳2冊(23・24)が「津山御城御引渡之節之覚聞書」と記された包紙で包まれている。岡山藩が現地で収集した情報に基づくものか。



23 さくしゅうおしろおひきわたしにんずうだて
作州御城引渡シ人数立
C8-214-1 1冊 元禄11年(1698) 12.2×17.2cm



24 まつだいらびぜんのかみさまごけらいつやま おいりしゅう
松平備前守様御家来津山へ御入衆
C8-214-2 1冊 元禄11年(1698) 12.2×17.2cm



25 まつだいらしんじらうあていけだいでいずものかみしよじょう
松平新太郎宛池田出雲守書状
C8-226 1通 寛永18年(1641)4月8日 38.5×54.6cm
備中松山藩主池田長常が池田光政にあてた書状。双方の領地が接する干潟での新田開発について、使者口上に申し述べると伝えている。この書状のことは、「池田出雲返事、(荒尾)志摩もあん持参仕候事」として『池田光政日記』同年同月9日条に見える。

26～30の備中松山城(高梁市)に関する5枚の絵図が、「備中倉敷絵図」「備中帯江陣屋図」と一緒に包紙に包まれている。



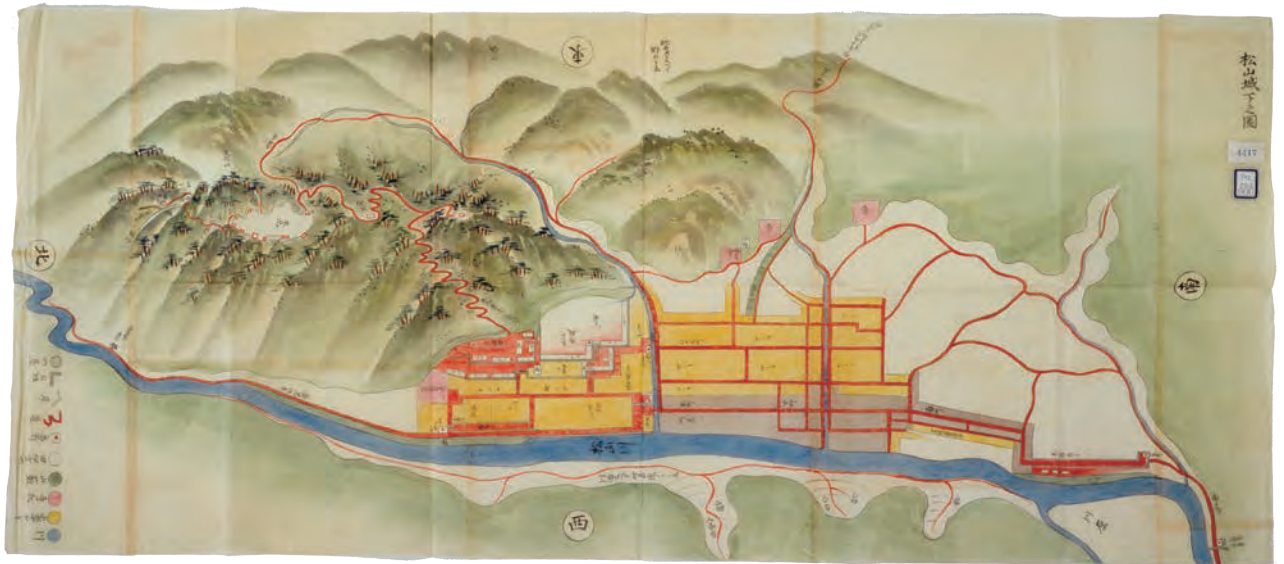
ほんまるたちえ^ず
26 本丸立絵図 T3-50-1 1枚 38.3×27.4cm

臥牛山山頂の本丸の様子を立体的に描いた俯瞰図。



ほんまるならびにてんしゅのひらえず
 27 本丸并天守之平絵図 T3-50-7 1枚 50.2×39.3cm

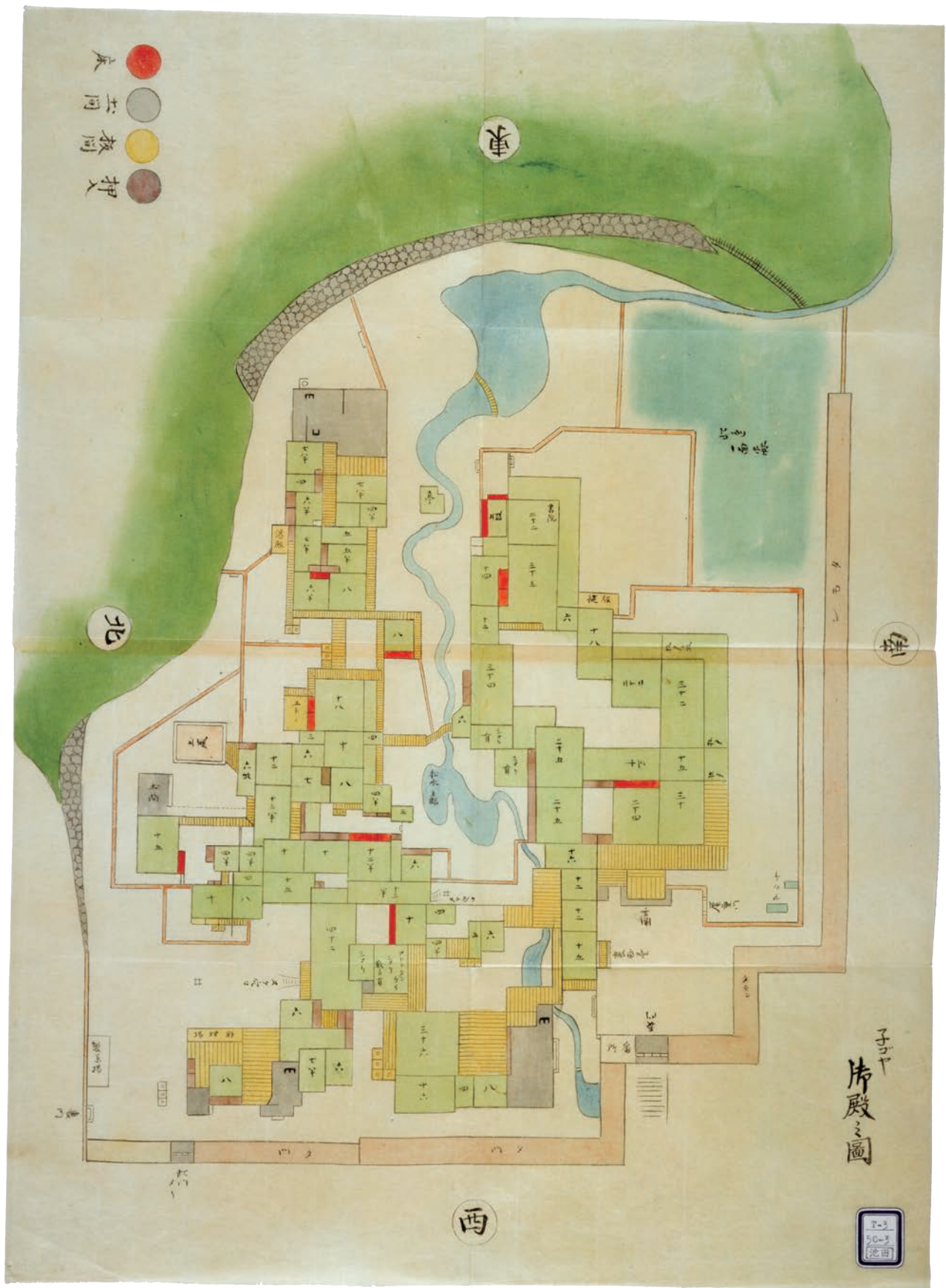
本丸の天守や櫓などの建物を平面的に描いた図。「伊木家来居之」という書き込みがあり、幕末に岡山藩が松山を鎮撫した際に作られたものか。



28 まつやまじょうかのず
松山城下之図 T3-50-2 1枚 43.4×101.0cm
松山城下町の様子を描いた図。家中屋敷・寺地・町屋が色分けして示されている。



29 ねこや
根小屋の図 T3-50-4 1枚 39.1×54.7cm
松山城下の根小屋地区の様子を描いたもの。根小屋とは、城館を中心に発達した平時の居住区のことをさす。備中松山城では、軍事的な拠点があるのに対し、山麓の根小屋には藩主の住居や政庁があった。



ねごやごてんのす
30 根小屋御殿之図 T3-50-3 1枚 54.3×39.3cm

根小屋御殿の間取りを示した絵図。凡例にない薄緑色は畳敷きを示す。

31 びっちゅうまつやまじょうおうけとりわたいいっかん
備中松山城御請取渡一卷

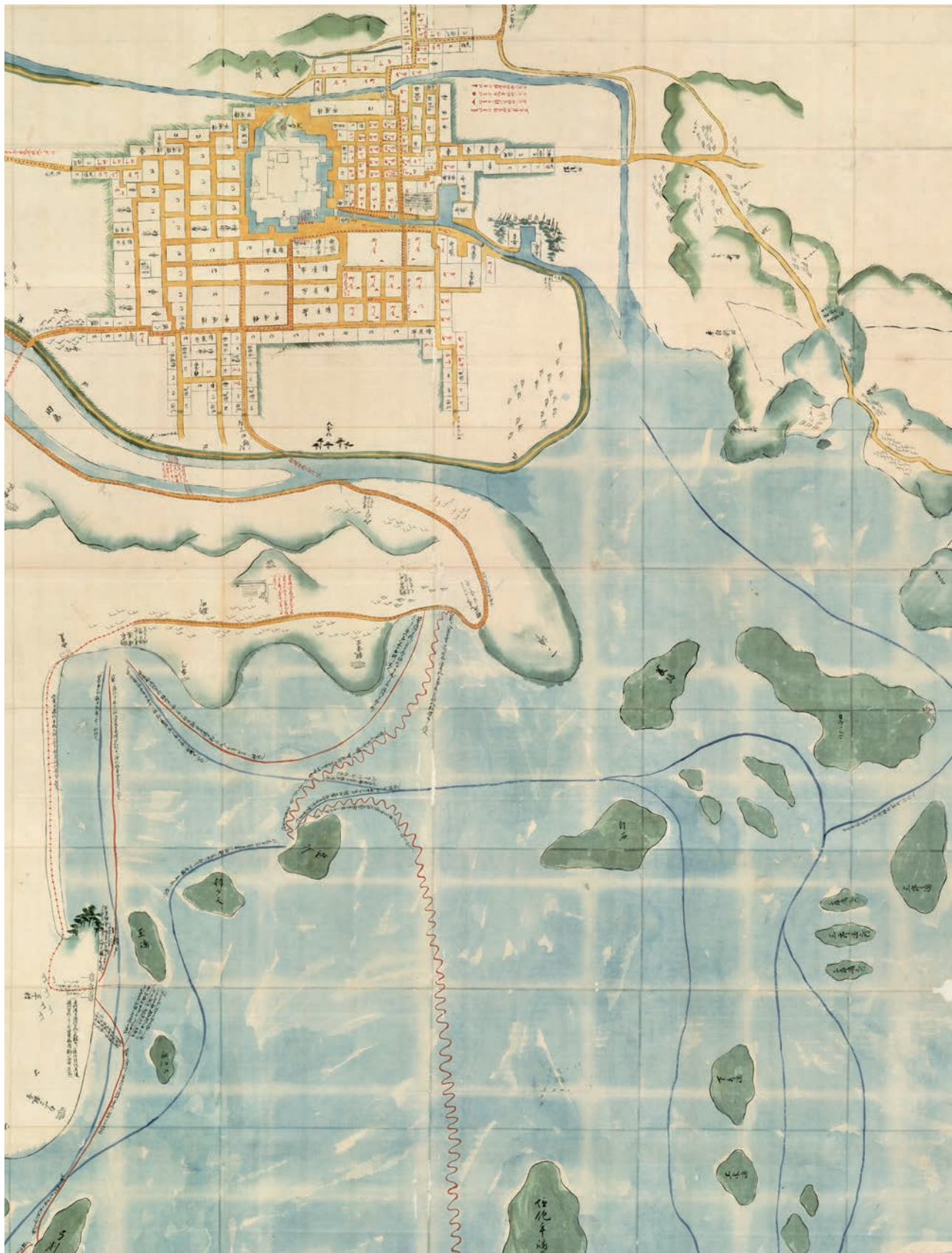
C7-274 1冊 元禄7年(1694) 27.9×20.4cm

水谷家断絶により松山城を請け取るために、赤穂藩浅野内匠頭および上使堀小四郎・駒井内匠が派遣された。その一行を藩境などで岡山藩が饗応した際の記録。赤穂藩家老大石内蔵助の名前も見える。



32 びんごふくやまじょうず
備後福山城図 T3-273 1枚 108.2×103.8cm

「斉輝君御分山陽道城々図」と表書きした袋入りのうち1枚。裏面の端に「備後福山城図」「辰」とあり、筆写者は「土倉一秀」。城郭の堀・石垣・櫓・蔵などが絵画的に描かれ、武家地・町屋地・寺地が色分けされている。

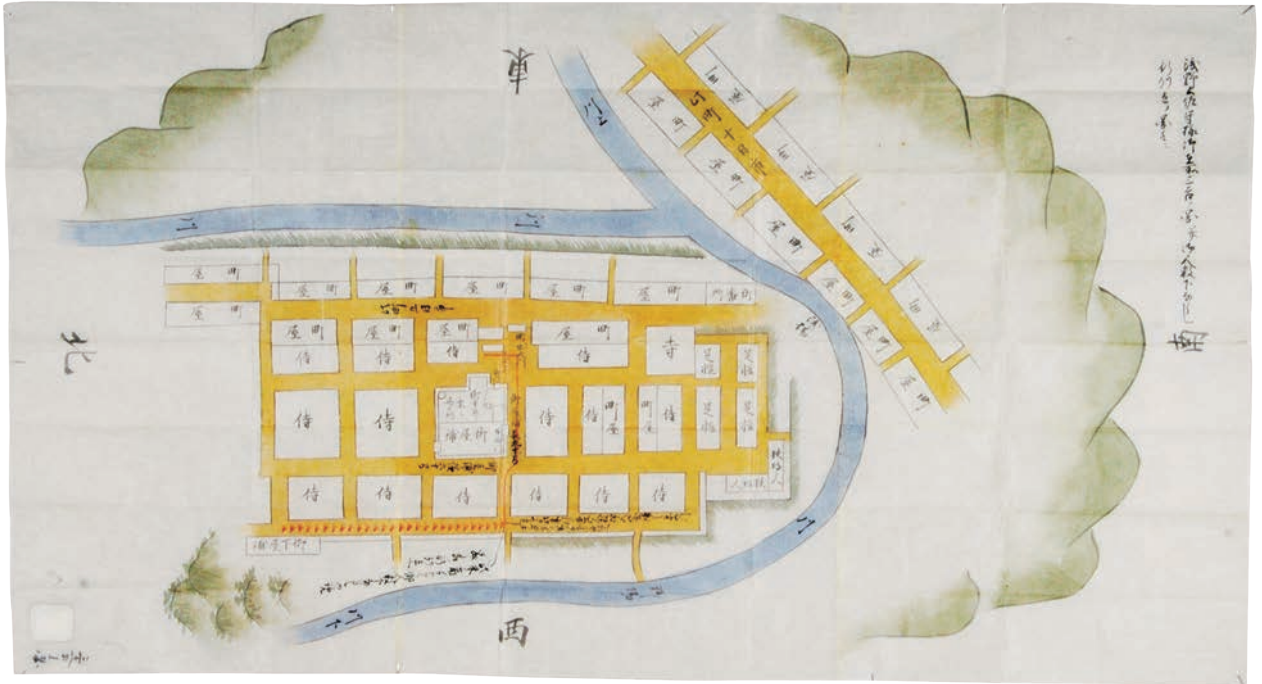


参考資料 びんごふくやまおしるうけとりえず 備後福山御城請取絵図(複製・部分) T3-7 1枚 元禄11年(1698) 211.6×197.2cm

水野家の断絶にともなう城請取に際して作られた絵図。このときの上使は青山播磨守幸督、城請取は松平駿河守定陳・浅野土佐守長澄、在番は京極縫殿高或であった。その通行路や丁場が細かく記されている。33の備後福山書付に含まれている絵図を写したもので、貼紙などは本図より少ない。部分を縮小・複製したものを展示した。

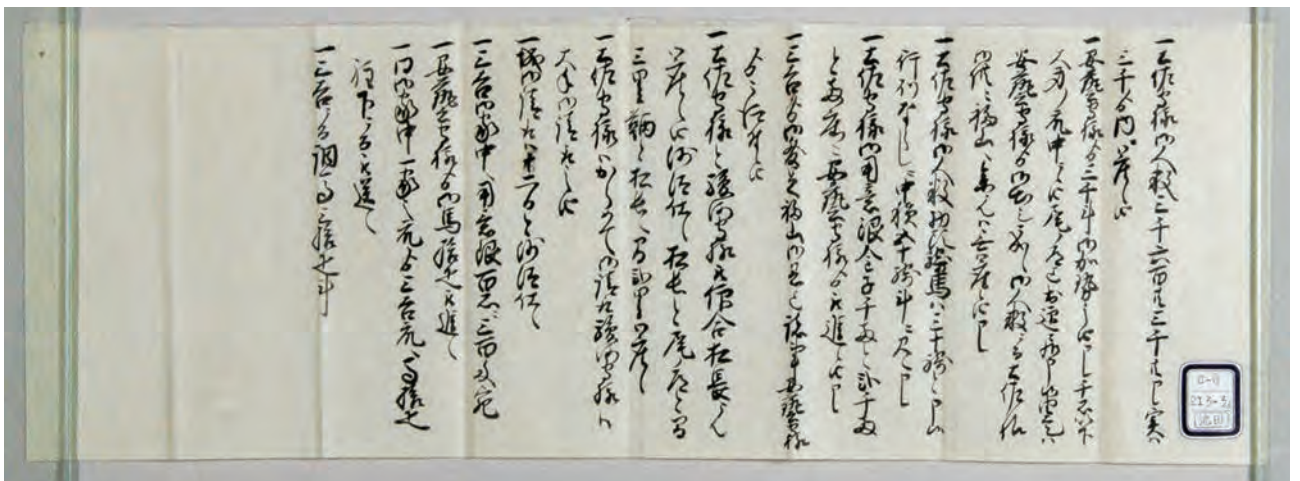
33 ^{びんごふくやまかきつけ} 備後福山書付 C8-213
20冊4通3枚 元禄11年(1698)

福山城の請取に関して岡山藩が収集した情報を記した聞書など。請取役の浅野土佐守長澄の居所である三次や鞆浦にまで役人を派遣して情報収集を行っている。それらを家老の日置猪右衛門が集約して江戸の藩主のもとに送った。



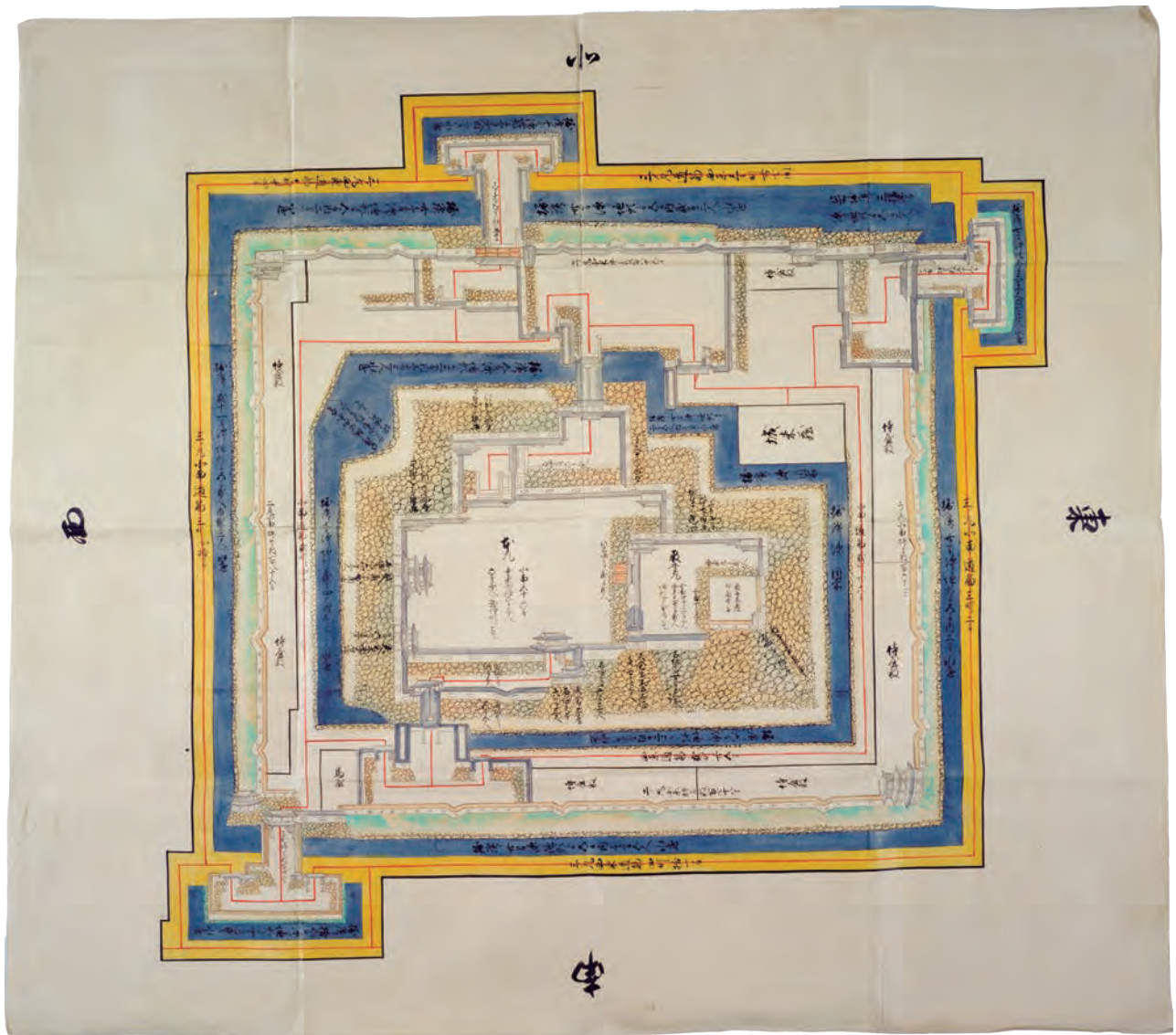
34 ^{みよしのず みよしにてけんぶんのぎかきつけ} 三吉之図「三吉二而見聞之儀書付」のうち C8-213-3-8 1枚 41.0×75.4cm

三吉(三次)の町並および藩主の屋敷を描き、あわせて出陣の下ならしの行列立の位置を示している。下ならしの様子を記した書付(35)もある。下ならしとは、出陣の予行演習のこと。



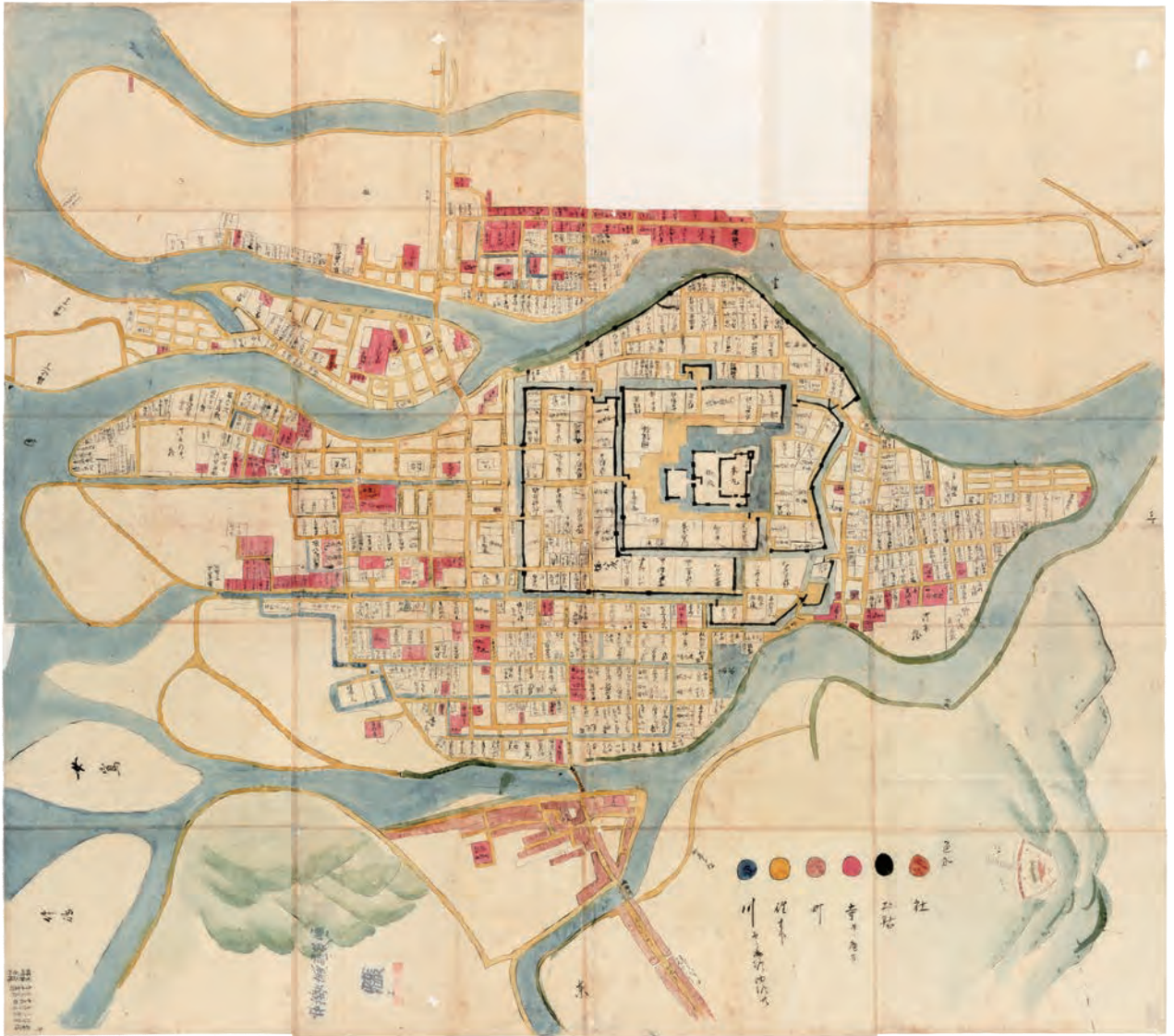
35 ^{した かきつけ みよしにてけんぶんのぎかきつけ} 下ならし書付「三吉二而見聞之儀書付」のうち C8-213-3-6 1通 28.9×41.5cm

下ならしの様子を記した書付。「騎馬三十」「総人数三千より内」と見える。



36 たんばのくにささやまじょうえず 丹波国笹山城絵図 T3-47 1枚 105.6×119.8cm

裏面の端には表題として「丹波国笹山城絵図」とある。櫓や門の形状とともに、堀や石垣の情報、本丸・殿守丸の広さなどが詳しく記されている。「正保城絵図」系統の絵図を模写したものか。



37 ^{あきひろしまじょうず} 安芸広島城図 T3-271 1枚 154.2×136.5cm

「斉輝君御分山陽道城々図」と表書きした袋入りのうち1枚。裏面端に「安芸広島城図」「頭」とある。筆写者として「淵本一信」以下8名が記されている。家臣の屋敷名や寺地はそれなりに記入されているが、町屋については色分けが不完全である。広島藩の資料に基づくものと思われるが、筆写の事情は不明である。地図の方位は上が西である。



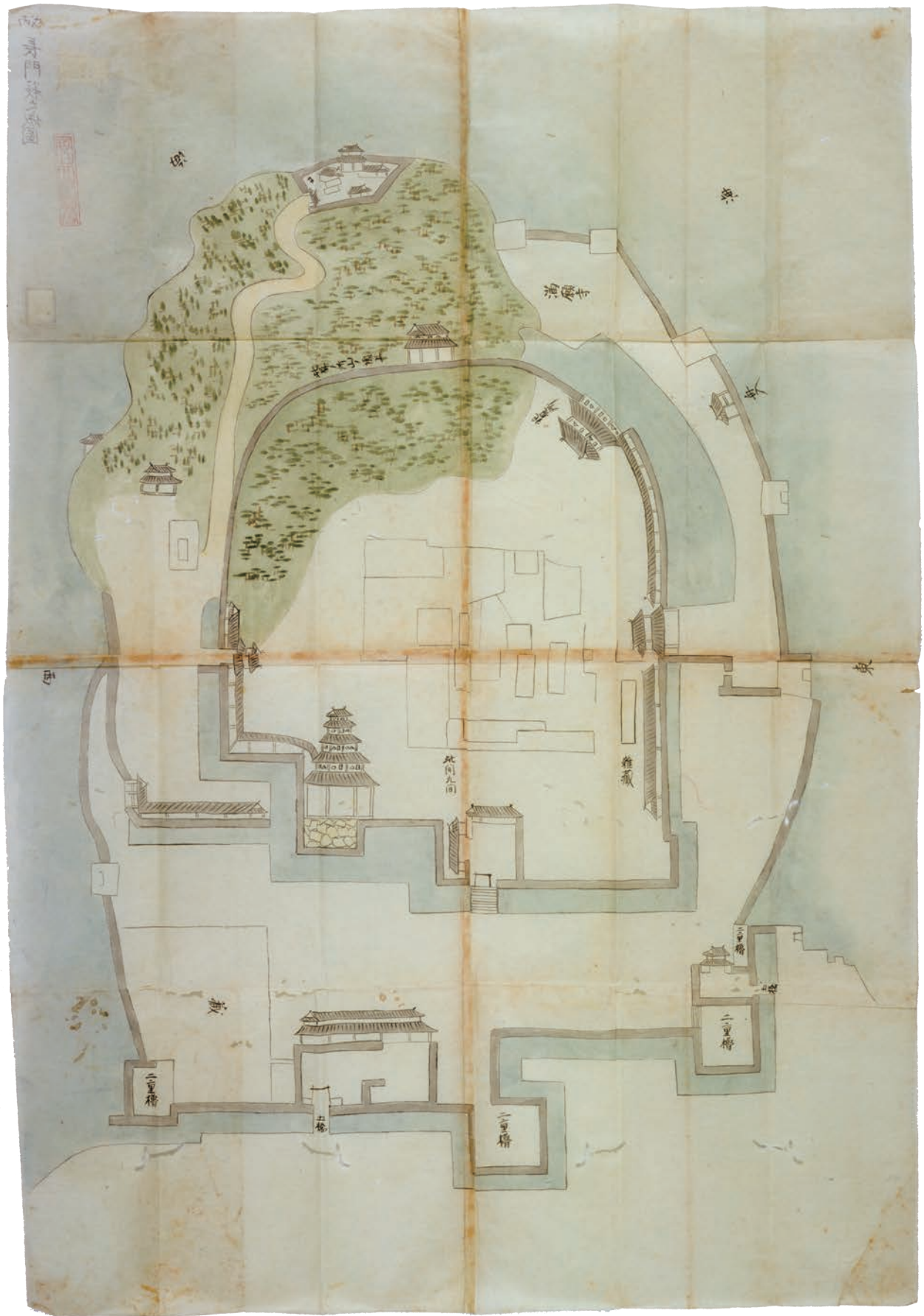
38 ^{びんごみはらじょうず} 備後三原城図 T3-272 1枚 27.4×40.2cm

「斉輝君御分山陽道城々図」と表書きした袋入りのうち1枚。裏面の端に「備後三原城図」「治」とある。山下の縄張りは描かれているものの、山上の曲輪については「見えず」として描かれていない。



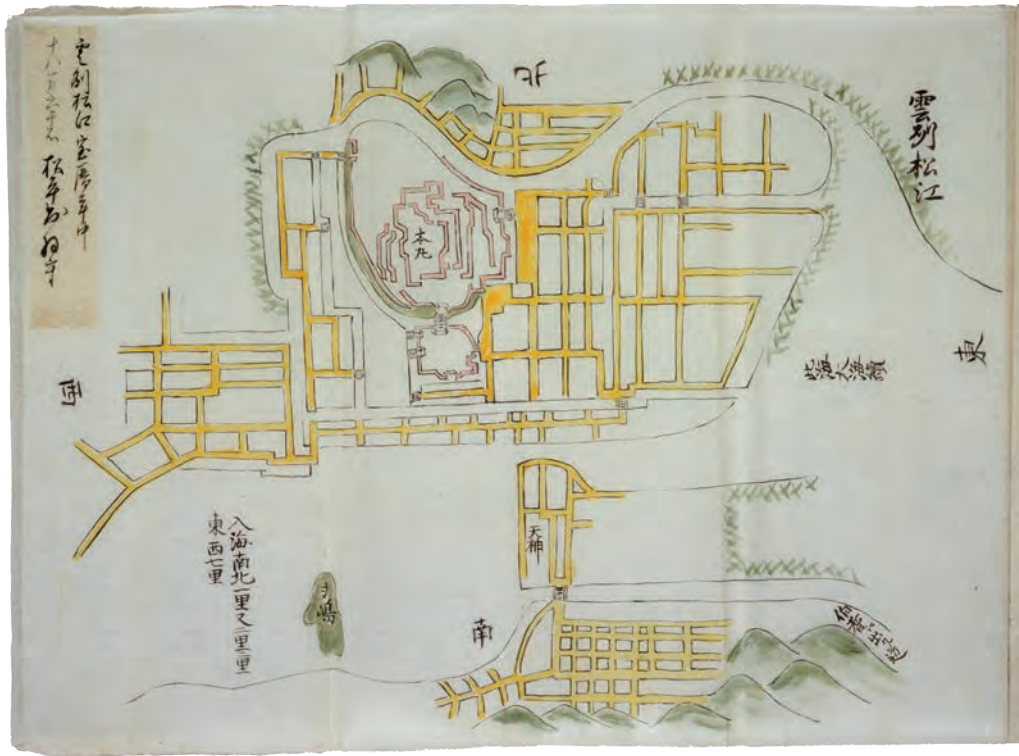
39 ^{すおうとくやます} 周防徳山図 T3-279 1枚 28.2×40.8cm

「斉輝君御分山陽道城々図」と表書きした袋入りのうち1枚。裏面の端に「丙戌周防徳山図」「嘉」とある。本丸の縄張りだけを描いた軍学用の略図である。



ながとはぎのしろす
40 長門萩之城図 T3-280 1枚 79.7×55.0cm

「齊輝君御分山陽道城々図」と表書きした袋入りのうち1枚。裏面の端に「丙戌長門萩之城図」とある。本丸の縄張りを描くが、御殿の間取りが描きかけであるなど、未完成な図である。



41 ^{さんいんどうさんようどうしよじょうず} 山陰道山陽道諸城図 T3-43 1綴 29.7×41.5cm

福知山・篠山・亀山・田辺・宮津・出石・鳥取・松江・津和野・浜田・姫路・龍野・赤穂・明石・岡山・長門府中・備中松山・萩・徳山・広島・福山・津山の22か所の城絵図が仮綴じされており、各紙には「八ノ一」「八ノ二」などと書き込まれている。「雲州松江」の箇所を展示した。



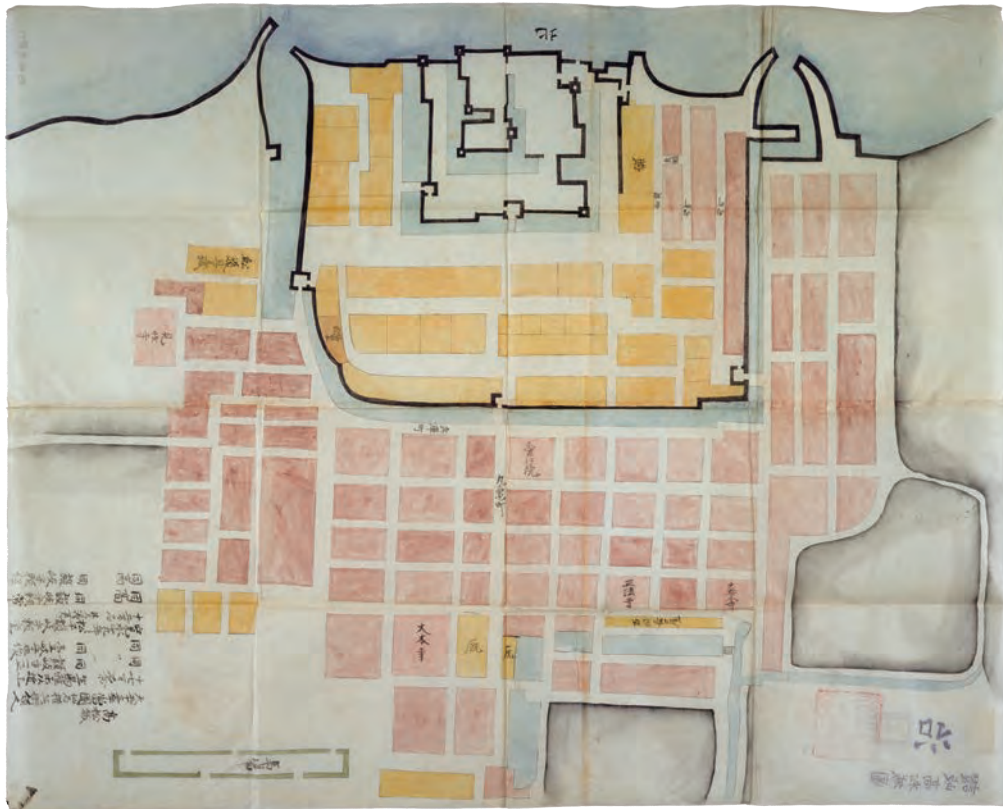
42 ^{せきしゅうはまのしろのず} 石州浜田ノ城ノ図 T3-269 1枚 28.4×40.7cm

「齊輝君御分山陰道城々図」と表書きした袋入りのうち1枚。裏面端に「石州浜田ノ城ノ図」「嘉」とあり、筆写者は「青地守節」。街道に沿った町屋の区画が墨線で引かれているが、細かな道路や町割の描写はない。



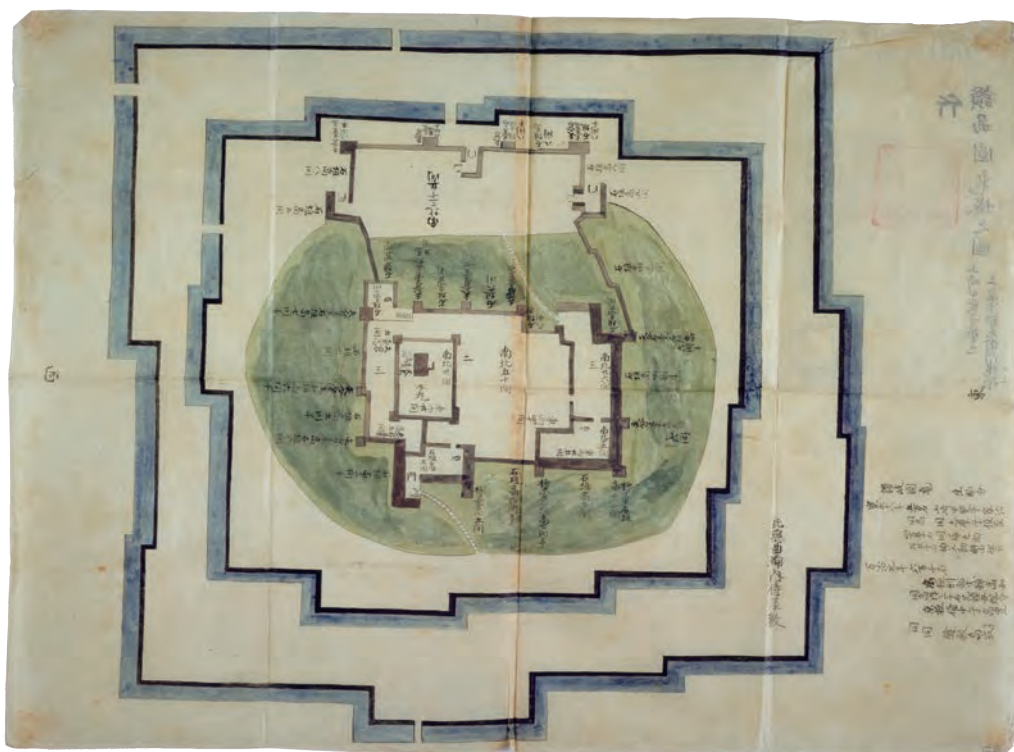
43 いわみつわのじょうず 石見津和野城図 T3-270 1枚 文化7年(1810) 39.8×70.4cm

「斉輝君御分山陰道城々図」と表書きした袋入りのうち1枚。裏面端に「庚午石見津和野城図」「治」とあり、筆写者は「松田久鎮」。山上の様子が鮮やかなのに比べて、山下の町並の描写は簡略である。



44 さぬきたかまつじょうず
讃岐高松城図 T3-18 1枚 54.0×66.8cm

「斉輝君御分南海道城々図」と表書きした袋入りのうち1枚。裏面の端に「讃岐高松城図」「治」とある。武家地と町屋地が色分けされている。



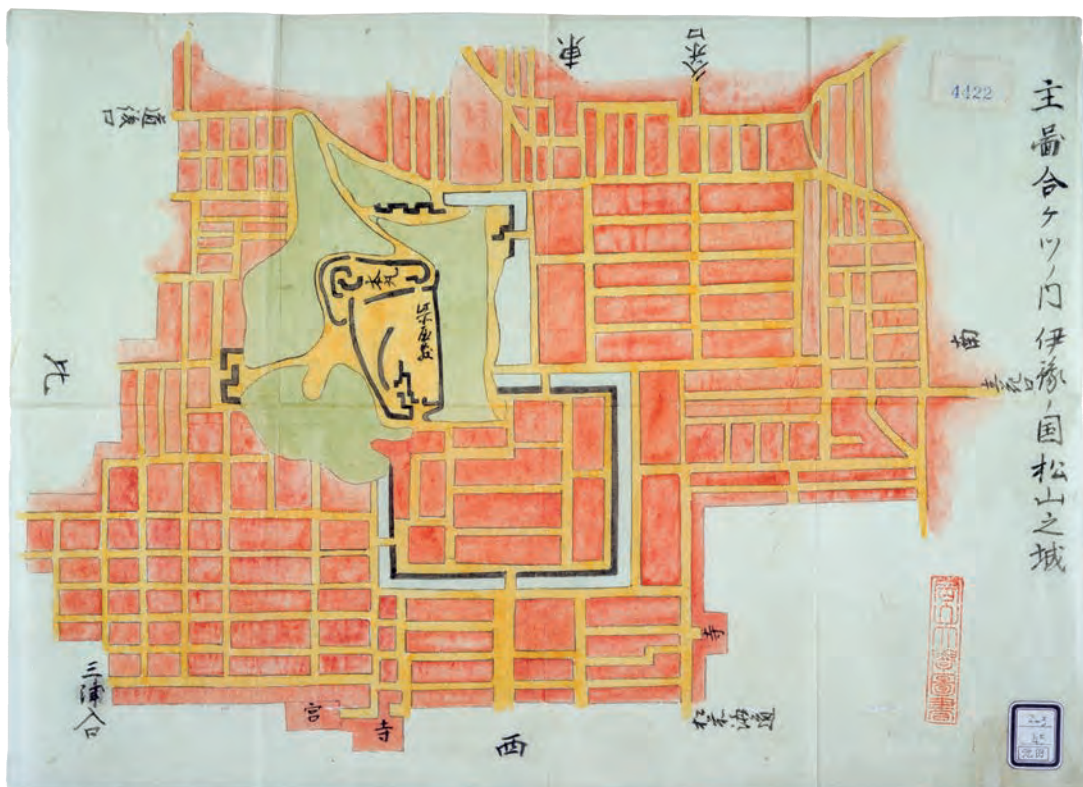
45 さんしゅうまるがめじょうず
讃州円亀城之図 T3-20 1枚 55.5×40.5cm

「斉輝君御分南海道城々図」と表書きした袋入りのうち1枚。裏面の端に「讃州円亀城之図」「竹」とあり、「山崎甲斐守築之、上泉治部左衛門繩張トモ云」と注記されている。「行田式英」とあるのが筆写した者であろう。「此総曲輪内侍屋敷」と記されている。



46 ^{よしゅうわじまじょうず} 予州宇和島城図 T3-17 1枚 27.7×40.0cm

「斉輝君御分南海道城々図」と表書きした袋入りのうち1枚。裏面の端に「予州宇和島城図」「治」とある。筆写者は「中尾欽崇」。丸の内と惣構えを示すだけの簡略なものである。



47 ^{いよのくにまつやまじょうず} 伊予国松山城図 T3-45 1枚 29.0×40.0cm

「主図合ケツノ内伊予ノ国松山之城」と記されている。他にも「主図合ケツノ内」と記された高松城図(T3-61)があり、一連のものか。高松城図の方には「正徳三年(1713)八月五日」という年紀がある。武家地と町屋地の区別はされていない。



48 ^{なんかいどうしよじょうず} 南海道諸城図 T3-51 1綴 29.0×40.4cm

和歌山・洲本・徳島・高松・丸亀・宇和島・大洲・松山・今治・高知の10か所の城絵図が仮綴じされている。綴じ紐の紙縫に「九部 十枚」と書かれ、各紙には「九一」「九ノ二」などの書き込みがある。「淡路須本」の箇所を展示した。

出展資料目録

番号	資料名	員数	年代	法量(cm)	池田家文庫 整理番号
1	播州姫路城下図	1枚		90.0×124.6	T6-31
2	播備淡侍帳	1冊	慶長17年(1612)	36.6×14.0	D1-262
3	播磨宰相様御代侍帳	1冊	元禄13年(1700)写	12.6×18.6	D1-1
4	池田氏時代姫路城下邸割図	1枚		127.0×130.0	T6-29
5	横井養元宛池田利隆書状	1通	慶長20年(1615)閏6月9日	36.0×54.2	C9-31
6	鳥取城図	1枚	文化7年(1810)	82.4×80.2	T3-268
7	因幡国鳥取絵図	1枚	元和5年(1619)	136.0×165.0	T3-3
8	因州御城図	1枚		84.0×101.6	T3-59
9	松平新太郎宛松平宮内書状	1通	年未詳4月9日	37.0×52.7	C9-38
10	侍与寄帳	1冊	寛永9年(1632)	14.2×20.2	D1-2
11	侍帳(鳥取藩池田家)	1冊	寛永11年(1634)	15.0×21.0	D1-3
12	松平新太郎宛松平相模守書状	1通	寛文6年(1666)カ11月8日	30.9×44.8	C8-236-2
13	口上之覚	1通		31.4×92.4	C8-236-3
14	口上之覚	1通		35.2×50.8	C8-236-4
15	赤穂城図	1枚	元禄14年(1701)	211.6×197.2	T3-5
16	播州赤穂城御請取渡一卷	1冊	元禄14年(1701)	27.4×21.0	C6-34
17	播州赤穂城図	1枚		81.0×82.0	T3-282
18	服部図書他宛池田主殿書状	1通	元禄14年(1701) 3月23日	17.0×71.0	C8-218-4-1
19	池田主殿宛津田左源太・藤岡勘右衛門書状	1通		17.0×37.1	C8-218-4-2
20	津山城図	1枚	元禄11年(1698)	118.5×118.0	T3-1
21	津山城下町図	1枚	元禄11年(1698)	203.7×136.0	T3-14
22	作州津山御城御請取渡一卷	1冊	元禄11年(1698)	27.9×20.6	C7-275
23	作州御城引渡シ人数立	1冊	元禄11年(1698)	12.2×17.2	C8-214-1
24	松平備前守様御家来津山へ御入衆	1冊	元禄11年(1698)	12.2×17.2	C8-214-2
25	松平新太郎宛池田出雲守書状	1通	寛永18年(1641) 4月8日	38.5×54.6	C8-226
26	本丸立絵図	1枚		38.3×27.4	T3-50-1
27	本丸并天守之平絵図	1枚		50.2×39.3	T3-50-7
28	松山城下之図	1枚		43.4×101.0	T3-50-2
29	根小屋の図	1枚		39.1×54.7	T3-50-4
30	根小屋御殿之図	1枚		54.3×39.3	T3-50-3
31	備中松山城御請取渡一卷	1冊	元禄7年(1694)	27.9×20.4	C7-274
32	備後福山城図	1枚		108.2×103.8	T3-273
33	備後福山書付	20冊 4通3枚	元禄11年(1698)		C8-213
34	三吉之図	1枚		41.0×75.4	C8-213-3-8
35	下ならし書付	1通		28.9×41.5	C8-213-3-6
36	丹波国笹山城絵図	1枚		105.6×119.8	T3-47
37	安芸広島城図	1枚		154.2×136.5	T3-271
38	備後三原城図	1枚		27.4×40.2	T3-272
39	周防徳山図	1枚		28.2×40.8	T3-279
40	長門萩之城図	1枚		79.7×55.0	T3-280
41	山陰道山陽道諸城図	1綴		29.7×41.5	T3-43
42	石州浜田ノ城ノ図	1枚		28.4×40.7	T3-269
43	石見津和野城図	1枚	文化7年(1810)	39.8×70.4	T3-270
44	讃岐高松城図	1枚		54.0×66.8	T3-18
45	讃州円亀城之図	1枚		55.5×40.5	T3-20
46	予州宇和島城図	1枚		27.7×40.0	T3-17
47	伊予国松山城図	1枚		29.0×40.0	T3-45
48	南海道諸城図	1綴		29.0×40.4	T3-51
参考 出展	備前岡山地理家宅一枚図(複製)	1枚	文久元年(1861)	302.4×168.3	T6-32
参考 出展	備後福山御城請取絵図(複製・部分)	1枚	元禄11年(1698)	211.6×197.2	T3-7

池田家文庫絵図展・記念講演会開催記録

池田家文庫絵図展

開催年度	展示テーマ	会 期
平 9	絵図にみる岡山城	1997年10月24日～11月2日
平 10	岡山藩と海の道	1998年10月23日～11月1日
平 11	後楽園と岡山藩	1999年10月23日～11月1日
平 12	備前慶長国絵図のふしぎ	2000年10月23日～11月1日
平 13	岡山藩江戸藩邸ものがたり	2001年10月23日～11月1日
平 14	開けゆく岡山平野 岡山藩の新田開発 (1)	2002年10月23日～11月1日
平 15	新田開発をめぐる争い 岡山藩の新田開発 (2)	2003年10月23日～11月1日
平 16	岡山城下町をあるく	2004年10月23日～11月1日
平 17	江戸時代の岡山 池田家文庫絵図名品展	2005年9月29日～10月10日
平 18	戦さと城	2006年10月26日～11月12日
平 19	陸の道	2007年11月16日～12月2日
平 20	日本と「異国」	2008年11月1日～11月16日
平 21	岡山藩の教育	2009年9月29日～10月18日
平 22	絵図にみる中国四国地方の城下町	2010年11月16日～11月28日

記念講演会

開催年度	記念講演会演題	記念講演会講師	期 日
平 9	絵図を読む	岡山大学文学部 教授 倉地克直	1997年10月25日
平 10	瀬戸内の交流	岡山県総合文化センター 総括学芸員 竹林榮一	1998年10月23日
平 11	日本庭園と後楽園	岡山大学農学部 教授 千葉喬三	1999年10月23日
平 12	江戸幕府の国絵図事業	東 垂 大 学 教授 川村博忠	2000年10月28日
平 13	岡山藩の江戸藩邸	東京大学史料編纂所 教授 宮崎勝美	2001年10月23日
平 14	津田永忠と岡山藩の土木事業	岡山大学環境理工学部 教授 名合宏之	2002年10月26日
平 15	近世の境界論争と裁判	東京大学史料編纂所 助教授 杉本史子	2003年10月23日
平 16	岡山城下町を掘る ～絵図と遺構～	岡山市デジタルミュージアム 開設事務所 乗岡 実	2004年10月23日
平 17	池田家文庫絵図の見方	岡山大学文学部 教授 倉地克直	2005年10月 1日
平 18	「長久手合戦図屏風」の世界	茨城大学人文学部 教授 高橋 修	2006年10月26日
平 19	江戸時代の陸上交通	岡山県立記録資料館 館長 在間宣久	2007年11月23日
平 20	「鎖国」の中の日本と朝鮮	名古屋大学文学部 教授 池内 敏	2008年11月 1日
平 21	儒学教育と武士の人間形成	京都大学教育学研究科 教授 辻本雅史	2009年10月 3日
平 22	デジタルマップで甦る城下町	徳島大学大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部 教授 平井 松午	2010年11月20日

平成16年度までは「池田家文庫等貴重資料展」、平成17年度から「池田家文庫絵図展」

平成9年度～平成16年度は岡山大学附属図書館、平成17年度からは岡山市デジタルミュージアムで開催

謝 辞

本展の開催にあたり、下記の関係者の方・機関に多大なご協力を賜りました。
ここに記し、感謝の意を表します。(敬称略、順不同)

乗岡 実

周南市

企画展

平成22年度 池田家文庫絵図展

絵図にみる 中国四国地方の城下町

発行日 : 2010年11月16日

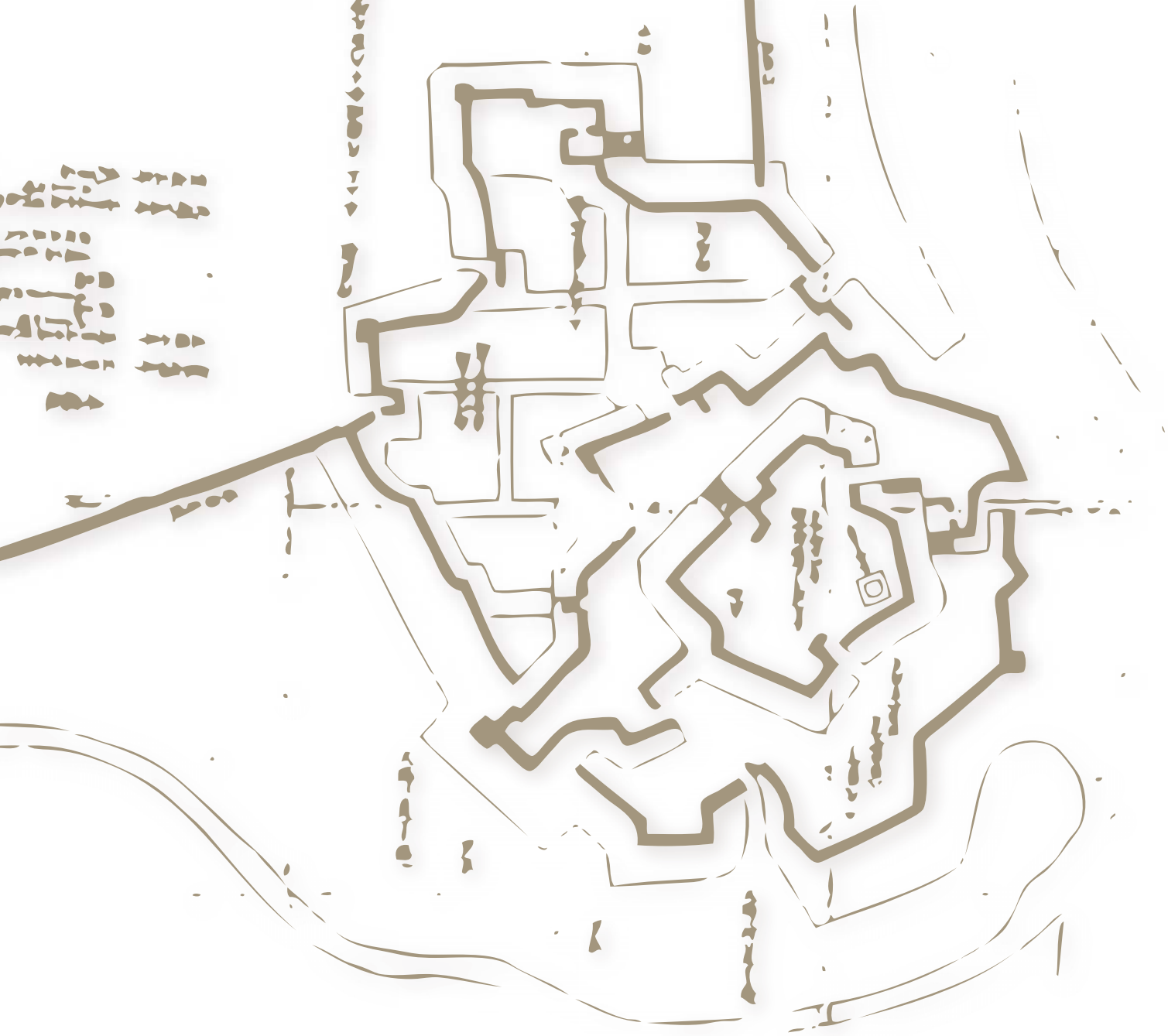
主 催 : 岡山大学附属図書館 岡山市デジタルミュージアム

発 行 : 岡山大学附属図書館

〒700-8530 岡山市北区津島中3-1-1

TEL 086-251-7322

印 刷 : アイブリックス株式会社



岡山大学附属図書館



岡山市デジタルミュージアム